

論文内容要旨

日中両言語における存在型アスペクト形式の認知言語学的研究

東北大学大学院国際文化研究科
国際文化研究専攻
黄 利斌

指導教員	副島	健作	准教授
指導教員	上原	聡	教授
指導教員	江藤	裕之	教授

本論文の中心的なテーマは、存在動詞を語彙的源泉とする日中両言語の存在型アスペクト形式である。中国語については、「V有」をアスペクトの体系に位置づけ、他の存在型アスペクト形式と比較しながら、記述的かつ理論的な考察を行った。また、日中対照の観点から、日本語の存在型アスペクト形式「Vテアル」を中心に持ち上げ、アスペクト体系に位置づけて分析した。本論文は、日中両言語における存在型アスペクト形式は主体の状態に重点が置かれる表現だけではなく、客体の状態に重点が置かれる表現を確立させているという特徴を明らかにしたものである。

1. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

- 第1章 序論
- 第2章 先行研究および研究課題
- 第3章 本研究の理論的枠組み
- 第4章 中国語「V有」に関する考察
- 第5章 中国語「有V」に関する考察
- 第6章 日本語「Vテアル」に関する考察
- 第7章 「V有」、「有V」と「Vテアル」の対照
- 第8章 結論

第1章では、研究動機と目的、研究対象、研究方法および用語の定義について述べた。

第2章では、動詞カテゴリーにおけるアスペクトの位置づけを述べた上で、中国語と日本語におけるアスペクト研究の流れを概観し、その問題点を指摘し、5つの研究課題を設定した。

第3章では、本研究に関連する場の理論、参照点、動的使用基盤モデル、事態認知モデルなどの認知言語学の理論的枠組みを紹介した。

第4章では、「V有」と存在動詞「有」との関係に着目し、「V有」構文を2類型に分類した上で、「V有」構文と典型的存在構文との拡張関係を究明した。また、「V有」構文に用いられる動詞の特徴を分析した上で、存在型アスペクト形式「V着」、「在V」との比較を通して、「V有」は対象の結果状態に重点が置かれる「客体結果相」であることを明らか

にした。

第5章では、「有V」構文が「有N」構文から拡張したことを明らかにした。また、「有V」構文に用いられる動詞の特徴を分析し、「有V」の機能に相当するとされている完了型アスペクト形式「V了」との比較を通して、「有V」構文の意味特徴を明らかにした。

第6章では、「Vテアル」と存在動詞「アル」との関係に着目し、「Vテアル」を3類型に分類した上で、典型的存在構文との拡張関係を明らかにした。また、これまでの研究とは違って、「小説」、「新聞」、「会話」という3つのジャンルのテキストを調査し、「Vテアル」の使用実態を考察した。さらに、「Vテイル」、「Vラレテイル」との比較を通して、「Vテアル」は客体対象の結果状態に重点が置かれる「客体結果相」であることを明らかにした。

第7章では、統語的、意味的な観点から中国語の「V有」、「有V」を日本語の「Vテアル」と対照し、日中両言語の存在型アスペクトの特徴を明らかにした。また、共時的な面から、中国語の「V有」、「有V」と日本語の「Vテアル」が文法化プロセスを考察した。

第8章では、本論文の結論、意義および新規性を述べて今後の課題を提示した。

2. 研究背景と目的

現代中国語では、基本アスペクト形式とされている「V了」、「V着」、「V过」の他に、動詞の直後に本来の存在動詞である「有」が結びつく「V有」形式と、動詞の前に「有」が結びつく「有V」形式とが存在している（王 2014:25）。「有V」は元々古代中国語や南方方言に多く見られる表現であるが、現在、標準語の中にも多く使用されている（王他 2006 など）。この2つの形式の基盤には、空間を通して時間を捉えるという概念メタファー（conceptual metaphor）が存在していると考えられる。存在動詞が文法化してアスペクト形式になることは世界中の言語にある普遍的現象である（Bybee 1985 参照）。本研究では、存在動詞を語彙的源泉とするアスペクト形式を「存在型アスペクト形式¹」と呼ぶことにする。

従来の中国語動詞のアスペクト研究では、「V了」、「V着」、「V过」は中国語のアスペクト形式の範例としてしばしば取り上げられるが（Li and Thompson 1981:184-237 ; Smith 1997:263-296 など）、「V有」や「有V」は個々の形式ごとの研究として行われてきた。し

¹ 「存在型アスペクト形式」は、金水（2006）などで使用されている用語である。

かしながら、しかしながら、これらの存在型アスペクト形式を解明するには、中国語アスペクトの体系に位置づけ、他のアスペクト形式との比較が欠かせないものである。

一方、日本語の「V テアル」も動詞のテ形に本来の存在動詞「アル」が結びついて、場所・空間的な存在の意味から拡張した存在型アスペクト形式である。これまで、「V テアル」に該当する中国語表現がないと言われている。「V テアル」に関する日中アスペクトの対照研究においても、主に「V テイル」に対応する中国語表現「V 着」、「V 了」が取り上げられている。したがって、「V テイル」に対しても「V テアル」に対しても、同じ中国語表現「V 着」、「V 了」で対応させている。また、日本語教育では、「V テアル」は初級項目として提示されているが、中国人日本語学習者にとっては、「V テアル」の意味特徴を理解することが困難である。筆者自身は十数年前から日本語学習を始めて以来、「V テアル」に該当する中国語表現は本当に存在していないのかと考え続けてきた。『日中対訳コーパス』を見ると、次のような対訳例が出てくる。

(1) a. 封筒の裏に石田玲子という名前が書いてあった。

(『ノルウェイの森』)

b. 信封 后面 写有 石田玲子 的 名字。

xinfēng hòumian xiě-yǒu shítíánlíngzi de míngzi

封筒 裏 書く-YOU 人名 の 名前

(『挪威的森林』)

日本語の場合、「書く」のテ形に本来の存在動詞「アル」が付いており、動作主が省略されている。同様に、中国語の場合、「写」（書く）の後に本来の存在動詞「有」が付いており、動作主が省略されている。両方とも対象の結果状態に重点が置かれる。このように、中国語の「V 有」と日本語の「V テアル」に共通して見られることは、偶然なのか、それとも言語類型論的に意味のあることなのか。また、偶然でないとすれば統一的に説明できることなのか。そこで、本研究は、存在動詞である中国語の「有」と日本語の「アル」から文法化した形式である「V 有」と「V テアル」を中心に考察し、日中両言語の存在型アスペクト形式の特徴を明らかにすることを目的とする。具体的に以下の5つの研究課題を設定した。

- ①「V有」は中国語のアスペクトカテゴリーの正当な形式であると言えるか?
- ②「有」と「V有」/「有V」、そして、「アル」と「Vテアル」とはそれぞれどのような相関があるか?
- ③「V有」、「有V」と「Vテアル」は体系の中にどのように位置付けられるか?
- ④「V有」/「有V」と「Vテアル」は実際にどのように使用されているか?
- ⑤このような存在型アスペクト形式は日中両言語の事態の捉え方をいかに反映しているか?

3. 研究方法

本研究は、木村（2006）、岡（2013）を踏まえて認知言語学のアプローチで存在型アスペクト形式と存在動詞との関係に焦点を当て、アスペクトを事態の存在の在り方として捉える。コーパスを利用して実証的観点から存在動詞を語彙的源泉とする存在型アスペクト形式—中国語の「V有」、「有V」と日本語の「Vテアル」を中心に諸特性を観察・調査し、これらの存在型アスペクト形式の場所・空間的な存在の意味からの拡張プロセスを明らかにする。そして、体系の機能単位間の対立の観点から、「V有」を中国語アスペクト体系に位置づけ、存在型アスペクト形式「在V」、「V着」との比較を行う。

構文は孤立して存在するのではなく、相互に有機的な関係を保って存在すると考えられる（益岡 1997:182）。「V有」の意味特徴を明らかにするためには、構文の表す幾つかの個別的な意味相互の間にいかなる関係が構成されているかという構文の多義性を考察するだけではなく、異なる構文の間の意味的な繋がりへの考察も欠かせないものである。したがって、本稿は「V有」構文を同じ存在動詞から文法化した「有V」構文と比較し、両者の共通点と相違点を考察する。さらに、日中対照の観点から、「V有」を「Vテアル」と対照させ、両言語の存在型アスペクト形式の特徴をより明らかにする。

4. 考察の結果

本研究では、序論で提示した仮説、「中国語の存在型アスペクト形式『V有』は、場所・空間的な存在の意味から拡張したものであり、継続相「V着」と相補分布的な関係をなし、1つの『客体結果相』である」を検証するために、2節に示した5つの課題を設定した。本節では、これらの課題にそって明らかにできた主な点を以下にまとめる。

①「V有」は中国語のアスペクトカテゴリーの正当な形式であると言えるか？

文(2)のように、「V有」構文には他のアスペクト形式「V了」や「V着」を用いることができないが、「有」は「了」又は「着」と入れ替えることができる。すなわち、「V了」、「V着」と「V有」はシンタグマティックな関係ではなく、パラディグマティックな関係にある。

(2) 墙上 挂有 { *了 / *着 / } 一幅 画。

qiángshàng guà-yǒu -le -zhe yīfú huà

壁上 掛ける-YOU -LE -ZHE 一枚 絵

(壁に絵が一枚掛けてある。)

(3) *墙上 挂 一幅 画。

qiángshàng guà yīfú huà

壁上 掛ける 一枚 絵

(作例)

また、「有」を用いた文(2)は既然の事態を表し、自然な文であるが、「有」を省略した文(3)は未然事態を表し、非文になる。既然の事態として述べるには「V有」が必要である事実から、この形式が基本的にはアスペクトの機能を担っているという認識は否定し難い。「V有」は動作行為による対象の結果状態を表す。つまり、「V有」は「結果性」という独自のアスペクト的意味をもち、中国語アスペクトカテゴリーの正当な形式である。

②「有」と「V有」/「有V」、そして、「アル」と「Vテアル」とはそれぞれどのような相関があるか？

存在動詞としての「有」と「アル」は存在用法と所有用法という2つの用法に大別できる。存在用法においては、「有」/「アル」が対象を内項とし、外項をもたない非対格自動詞的な項構造をもっている。これに対し、所有用法においては、「有」は外項と内項をもつ他動詞的な項構造をもっていると考えられる。一方、対象の結果状態に焦点が置かれる「V有」/「Vテアル」においては、外項が抑制されており、つまり、動作主が義務的に省略さ

れている。「有」は内項だけをもつ、非対格自動詞的な項構造であると考えられる。これに対し、客体対象の結果状態よりも動作行為のほうに焦点が置かれる「V有」/「Vテアル」においては、動作主が明示されて主格の位置にたち、対象が対格の位置にたつ。外項と内項両方をもつ、他動詞的構造であると考えられる。すなわち、「V有」/「Vテアル」表現は存在動詞「有」/「アル」の「存在」と「所有」といった二面性を継承していると考えられる。

その上で、Langacker (2008 etc.) の認知文法の枠組みで、「V有」と「Vテアル」の成分構造 (component structure) と合成構造 (composite structure) を考察した。中国語の「V有」に関しては、「結果の継続」を表す文 (4a) は「有」の存在用法がプロファイルされて、動詞 V が表す動作がベースとなっている。これに対し、「パーフェクト」を表す (4b) は動詞 V が表す動作がプロファイルされて、「有」の所有用法がベースとなっている。そして、「パーフェクト」を表す「有 V」にも同じ合成プロセスが見られる。

- (4) a. 每家 每户 门口 都 放有 一个 统一 的 垃圾桶。
 měijiā měihù ménkǒu dōu fang-yǒu yīgè tǒngyī de lājītǒng
 各家 玄関口 全部 置く-YOU 1つ 同じごみ箱
 (各家の玄関口に同じごみ箱が置いてある。)

(『人民日报』、2016-02-14)

- b. 他 写有 100 多篇 观赏 奇石 的 散文。
 tā xiě-yǒu yībǎi duōpiān guānshǎng qíshí de sǎnwén
 彼 書く-YOU 100 編余り 鑑賞する 奇石 の 随筆
 (彼は奇石の鑑賞に関する随筆を 100 編余り書いている。)

(『人民日报海外版』、2004-06-21)

一方、日本語の「Vテアル」に関しては、「結果の継続」を表す (5a) では、場所名詞句が現れ、先行する動作が殆ど感じられず、動詞「アル」の表す対象の存在がプロファイルされている。「Vテ」の表す様態の用法がベースとなっている。「結果の継続」を表す (5b) では、場所名詞句が削除され、「アル」の表す結果状態の存在がプロファイルされ、「Vテ」の結果用法がベースとなる。そして、「パーフェクト」を表す (5c) では、動作主の顕在化により、具体的な物の存在ではなく、抽象的な物への所有を表す「所有」の用法が引き継

がれ、ベースとなる。「Vテ」の結果用法がプロファイルされている。

- (5) a. 押し入れの中に布団が畳んである。
- b. 窓が開けてある。
- c. この話は既に彼に言ってある。

このようにして、日本語の「Vテアル」は、「Vテ」と「アル」それぞれが単独で直接示す用法と両者が結合した場合のアスペクト的意味とは相関がある。同様に、中国語の「V有」/「有V」構文の意味も動詞Vと存在動詞「有」の独自の意味に関連しており、本来の存在動詞の表す場所・空間的な存在から拡張したものであると考えられる。

③ 「V有」、「有V」と「Vテアル」は体系の中にどのように位置付けられるか？

「V有」、「有V」と「Vテアル」の特徴を明らかにするには、体系の機能単位間の対立という観点から、すなわち、他のアスペクト形式との比較が欠かせないものである。本稿では、「V有」を存在型アスペクト形式「在V」、「V着」と比較させた。その結果を表1に示す。

表1. 「在V」、「V着」、「V有」の意味特徴

形式 \ 意味	基本的意味		派生的意味
	限界動詞	非限界動詞	
在V	動作の進行		
V着	結果の継続 (主体の状態)	動作の継続	単なる状態
V有	結果の継続 (客体の状態)	—	パーフェクト 単なる状態

「在V」は動作を動的に捉えて、限界動詞と結びついても非限界動詞と結びついても基本的に主体の「動作の進行」のみを表す。これに対し、「V有」は基本的に限界動詞と付いて動作行為の「結果の継続」を表す。よって、両者は相補的な関係をなしていると言える。

また、「V 着」は基本的に非限界動詞と結びつく場合には、進行中の動作を静的に捉えて「動作の継続」を表す。限界動詞と結びつく場合には、動作行為が終わった後の「結果の継続」を表す。副島（2007）は、「動作の継続」を動作の開始点において新しい状況が成立し、その状況が継続していることを表すと捉えることが可能であると指摘している。「V 着」が事態を状態化して捉えるのが基本であるため、非限界動詞に「着」が付いた場合、動きの開始点において、限界に達成して実現された状況が継続していると捉えられる。すなわち、「V 着」の表す「動作の継続」と「結果の継続」を「結果」というアスペクト的意味として一元化して捉えることができる。異なるところは、「動作の継続」においては、「結果」の開始点は動きの開始点である。「結果の継続」においては、「結果」の開始点は動きの終了点である。Jaxontov（1988）も「V 着」を「結果相」と位置付けている。よって、「V 着」も「V 有」も結果状態を表す「結果相」の表現であると言える。

しかしながら、「V 着」は基本的に主体の状態を表すのに対し、「V 有」は基本的に客体の状態を表す。文（6）では、主体である「他」（彼）の状態を表しているが、文（7）では客体である「板棚」（板囲いの小屋）の状態を表している。

(6) 他 戴着 帽子。

tā dài-zhe màozi

彼 付ける-ZHE 帽子

（彼は帽子を付けている。）

（Jaxontov 1988:113）

(7) 有些 木排 上 还 搭有 小小的 板棚。

yǒuxiē mùpái shàng hái dā-yǒu xiǎoxiǎode bǎnpéng

若干 イケダの上 も 建てる-YOU ちっぽけな 板囲いの小屋

（若干のイケダの上には、ちっぽけな板囲いの小屋が建ててある。）

（Яхонтов 1957:213）

また、「結果の継続」を表す「V 着」においては、動作主が削除され、客体の結果状態に重点が置かれるとされているが、動作主は最初から不問に付されている文（8a）に対し、動作主を補おうとすると、文（8b）のように「A+在 L+V 着+P」という形式で動作主を補うことも可能である。一方、「V 有」に関しては、文（8c）が示すように、動作主体は義務的に非明示されており、補おうとしても補うことができない。存在状態の背後に動作主体の存在を読み取ることが可能である「V 着」と比べ、動作主の存在を読み取りにくい「V

有」のほうは動作主との関わりが少なく、「対象指向性」をもっていると考えられる。よって、「V 着」は積極的に主体の状態を表すのに対し、「V 有」は積極的に客体の状態を表す。両者は相補分布的な関係をなしていると言える。

(8) a. 墙上 貼着 一幅 画。

qiángshàng tiē-zhe yīfú huà

壁上 貼る-ZHE 一枚 絵

(壁に絵が一枚貼ってある。)

b. 他 在 墙上 贴着 一幅 画。

tā zài qiángshàng tiē-zhe yīfú huà

彼 に 壁上 貼る-ZHE 一枚 絵

(彼は壁に一枚の絵を貼ったままにしてある。/彼は壁に一枚の絵を貼っているところだ。)

c. ??他 在 墙上 贴有 画儿。

tā zài qiángshàng tiē-yǒu huà'er

彼 に 壁上 貼る-YOU 絵

(作例)

一方、日本語の存在型アスペクト形式「V テアル」に関しては、「V テイル」、「V ラレテイル」と比較した結果を表 2 に示す。「V テイル」の基本的意味は、限界動詞と結びつく場合、「結果の継続」を表す。非限界動詞と結びつく場合、「動作の継続」を表す。そして、「V ラレテイル」は「V テイル」の特徴を受け継いでいる。一方、「V テアル」の基本的に限界動詞と結びついて「結果の継続」を表す。

表 2. 「V テイル」、「V ラレテイル」、「V テアル」の意味特徴

意味 形式	基本的意味		派生的意味
	限界動詞	非限界動詞	
V テイル	結果の継続 (主体の状態 ²)	動作の継続	パーフェクト/反復 (習慣) /単なる状態
V ラレテイル	結果の継続 (客体の状態)	動作の継続	パーフェクト/反復 (習慣) /単なる状態
V テアル	結果の継続 (客体の状態)	—	パーフェクト

「V テイル」と比べて、「結果の継続」を表す「V テアル」は動作主が義務的に省略されて対象の結果状態に重点が置かれる。また、「パーフェクト」を表す「V テアル」は「動作主ガ対象ヲ～V テアル」という構文形式をもっているとされているが、コーパスから抽出したデータの中では、主格にたつ動作主は表面上格助詞ガではなく、係助詞ハで表されている「V テアル」が圧倒的に多い。ガ格は「叙述部 (ドメイン) 内における最高の顕著性」というスキーマ的意味をもっている菅井 (2002:178)。すなわち、「パーフェクト」の「V テアル」における動作主がガ格でマークされにくいことは、動作主は最高の顕著になりにくいことを意味する。話し手の視点は既知情報ではなく、対象にあると考えられる。

また、「V ラレテイル」が限界動詞と結び付く場合に、「V テアル」と同様に、動作主が省略されて客体の状態を表すが、「V テアル」とは異なり、「V ラレテイル」においては動作主を補うことが可能である。よって、「V テアル」も「V 有」も積極的に客体の状態をさしだす1つの「客体結果相」である。

「V 有」と「V テアル」とは、動詞に関する制限においても類似した特徴が見られる。コーパス調査の結果、「V 有」において出現数前5位の動詞は「印」(刷る)、「装」(取り付ける)、「存」(預ける)、「留」(残す)、「写」(書く)である。「V テアル」において出現数前5位の動詞は「書く」、「置く」、「貼る」、「掛ける」、「記する」である。すなわち、両者に用いられやすいのは他動性の高い主体動作・客体変化動詞である。ただし、「V 有」は「V テアル」とは異なり、用いられる動詞は「出現」という特徴をもっており、消失の意味を

² 副島 (2007) は、「V テイル」を主体結果相と名付け、基本的に主体の状態を表すと指摘している。

もつ動詞が用いられにくい。これは中国語存在型アスペクト形式の1つの特徴である。

一方、動詞Vの前に「有」が結びつく「有V」は「V有」とは異なり、対象に焦点を当ててではなく、行為に焦点を当て、「先行する事態が主体という場に存在している」という意味をもつ。この違いは類像性の観点から分析できる。すなわち、存在動詞「有」では、一般に「有」の後の部分が焦点となる。「V有」の場合は、「有」の後に対象が現れ、対象のほうに関心が置かれる。これに対し、「有V」の場合は、「有」の後に動詞Vが現れ、動詞の表す動作のほうに関心が置かれるわけである。

また、これまで「有V」の機能は「V了」に相当すると指摘されているが、「有V」は「V了」とは異なり、「行為を弱めて出来事をモノ化する」、そして、「VPの部分を焦点化する」という2つの固有の特徴を有している。すなわち、「V了」と比べて弱い「対象指向性」をもっている。

④ 「V有」 / 「有V」と「Vテアル」は実際にどのように使用されているか？

使用領域に関しては、「V有」は話し言葉よりも書き言葉として多く使用されている。これまで「V有」は文語的表現であり、文体的な制限があると指摘されているが、話し言葉コーパスにおいても「V有」の使用が確認されていることから、この形式は特定の文体において使用制限を受けているのではなく、「V有」自体がもつ「客観性」で、書き言葉において使用機会が多くなっているだけであると言える。これは存在動詞「有」の客観性に由来していると考えられる。これに対し、「有V」は話し言葉として使用されると指摘されている。確かに、この形式は発話時が参照点になり、先行する事態と関連付けられるため、話し言葉として多く使用される。ただし、調査した結果、「有V」は話し言葉だけではなく、新聞など書き言葉としても使用されている。

一方、これまで「Vテアル」に対する考察は主に小説データが中心であるが、本研究は規模がほぼ同じである小説・新聞・会話コーパスから、「Vテアル」表現を考察した結果、この形式の使用領域は偏っていることを明らかにした。会話コーパスでは、「Vテアル」表現の用例が一番多く（565例）、全体の約69%を占めている。つまり、「Vテアル」は書き言葉よりも話し言葉として広く使用されていることが言える。これは「内面的、心理的」である「パーフェクト」の「Vテアル」が会話の中で多く使用されていることに関連している。

⑤このような存在型アスペクト形式は日中両言語の事態の捉え方をいかに反映しているか？

木村（2006）を踏まえ、本研究は中国語のアスペクト形式は自律的なものではなく、ある事態が空間的又は時間的に「実存する」という大きなカテゴリーの中に位置付けている。存在型アスペクト形式「V有」と「有V」は事物が具体的な場所又は抽象的な場に存在するとして捉えられる。「結果の継続」を表す「V有」においては、場所的表現が必須であり、物が具体的な場所に出現して存在することが表される。行為を中心に事態を捉えるのではなく、コトの生成を中心に事態を捉えるのである。また、「パーフェクト」を表す「V有」と「有V」においては、具体的な場所が存在しないものの、動作主（経験主）を抽象的な場として捉えることができる。また、中国語は「主題優越型の言語」であり（Li&Thompson1976）、「動作主+動作」よりも日本語のように「主題+解説」型の表現が好まれる。完了型アスペクト形式「V了」と比べ、「パーフェクト」を表す存在型アスペクト形式「V有」と「有V」における動作主（経験主）は主題として捉えられやすい。主題の概念は基本的に「場所」の概念をメタファー的に拡張したものである（池上1981）。「パーフェクト」を表す「V有」と「有V」においては、動作主（経験主）を場として捉えて、場である動作主（経験主）を参照点として先行する事態へアクセスし、その場において先行する事態が存在することが表される。よって、「出現→存在」という在り方はまさに日本語の「場所においてコトガナル」という事態把握に近いと言える。

5. 本研究の意義と今後の課題

本研究の意義と新規性については、以下の4点が挙げられる。

まず、従来の「V有」に関する研究とは異なり、本研究は存在動詞を語彙的源泉とする存在型アスペクト形式「V有」を中国語アスペクト体系に位置付けて、体系の機能単位間の対立の観点から、他の存在型アスペクト形式「在V」、「V着」、「有V」と比較し、これらのアスペクトの対立関係を明らかにした（表1）。

次に、日中対照の観点から初めて中国語の存在型アスペクト形式「V有」を日本語の存在型アスペクト形式「Vテアル」と対照させることによって、日中両言語における存在型アスペクト形式は主体の状態に重点が置かれる表現だけではなく、客体の状態に重点が置かれる表現を確立させているという特徴を明らかにした。これは日中両言語のアスペクト

体系の在り方を解明することに繋がるものと考えられる。

また、日本語学習者としての筆者は、日本語を外国語として学習者の立場から母国語との対照を通して客観的に分析する必要があると痛感している。そういうことも念頭に置きつつ、本研究は日本語教育または中国語教育への応用を視野に入れている。これまで、中国語には日本語「V テアル」構文のような構文が存在しないと言われてきたが、本研究は初めて「V 有」構文、「有 V」構文と「V テアル」構文を対照させることによって、中国語にも日本語「V テアル」構文のような表現が存在していることを確認し、構文的・意味的観点からその対応関係を明らかにした。中国人日本語学習者に対して「V テアル」構文を教える際、或いは日本人中国語学習者に対して「V 有」構文、「有 V」構文を教える際に、より効果的な指導の方法に繋がると考えられる。

さらに、東アジアの言語の立場から見ると、これまでアスペクトと捉えられた形式は、ほとんど存在表現から文法化したものである（岡 2013）。木村（2006）、岡（2013）が提案しているように、本研究は認知言語学の枠組みでアスペクトを事態の存在様態を規定する仕方の1つとして捉えている。事態がどのような形で存在するかという観点から日中両言語の存在型アスペクト形式を分析したものは、日中アスペクト論において、これまであまり見られなかった。そういう意味で、本研究は日中存在型アスペクト形式を存在論的に位置付けて捉えなおそうとする、初めての試みであると言える。

本研究は日中両言語の存在型アスペクト形式に焦点を当て、アスペクトを存在論的に位置付けて考察してきた。中国語のアスペクト形式に関しては、存在型アスペクト形式がほとんどであるが、完了型アスペクト形式も存在している。今回あまり焦点が当てられなかった完了型アスペクト形式「V 了」は存在型アスペクト形式「V 有」、「有 V」、「V 着」、「在 V」と語彙的源泉が異なっているため、これらの存在型アスペクト形式とどのように関連しているかという問題が残されている。

また、今回の分析により、日本語の「V テアル」、「V ラレテイル」と中国語の「V 有」は、動作主が省略され、対象が主格の位置に昇格される、という格交替の現象が見られる。すなわち、これらの形式は単なるアスペクトの問題ではなく、ヴォイスの問題にも関わっていることが分かった。日本語の「V テアル」、「V ラレテイル」と中国語の「V 有」を、アスペクト、ヴォイスという相関性の立場からアプローチしていく必要もあると考えられる。これらの問題に関しては、今後の課題としたい。

参考文献

- Bybee, Joan L. 1985. *Morphology: A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins.
- 池上嘉彦 1981. 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館.
- Jaxontov, Sergej Je. 1988. “Resultative in Chinese.” in Vladimir P. Nedjalkov (ed.) *Typology of Resultative Constructions*, 113-133. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 木村英樹 2006. 『「持続」・『完了』の視点を超えて—北京官話における『実存相』の提案』『日本語文法』6(2): 45-61.
- 金水敏 2006. 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson 1976. “Subject and Topic: A New Typology of Language.” in Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*, 457-489. New York: Academic Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson 1981. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 益岡隆志 1997. 『複文』くろしお出版.
- 岡智之 2013. 「第1章 日本語存在表現の文法化」「第2章 テンス・アスペクトの文法化と類型論」山梨正明他(編)『認知歴史言語学』3-38. くろしお出版.
- Smith, Carlota S. 1997. *The parameter of aspect*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- 副島健作 2007. 『日本語のアスペクト体系の研究』ひつじ書房.
- 菅井三実 2002. 「構文スキーマによる格助詞『が』の分析と基本文型の放射状範疇化」『世界の日本語教育』12: 175-191.
- 王冬梅 2014. 「从“是”和“的”、“有”和“了”看肯定和叙述」『中国语文』1:22-34.
- 王森・王毅・姜丽 2006. 「“有没有/有/没有+VP”句」中国语文 1:10-18.
- Яхонтов, Сергей Евгеньевич 1957. *Категория глагола в китайском языке*. Издательство Ленинградского университета. 橋本萬太郎(訳) 1987. 『中国語動詞の研究』白帝社.

論文審査の結果の要旨

学位の種類	博士（国際文化）	氏名	黄利斌
学位論文の題名	日中両言語における存在型アスペクト形式の認知言語学的研究		
論文審査担当者氏名 (主査) 副島 健作, 上原 聡, 江藤 裕之, 中村 渉			
論文審査の結果の要旨 (1,000 字内外) <p>本論文は、存在動詞から文法化したアスペクト（以下、「存在型アスペクト形式」と呼ぶ）として中国語の「V有」および「有V」構文、日本語の「Vテアル」構文を取り上げ、本動詞としての多義構造とアスペクト形式としての多義構造を詳細に分析することによって、従来とは異なる観点から存在動詞がアスペクト的意味を派生させるしくみを明らかにしたものである。従来の研究では、日本語の「Vテアル」が変化結果の対象の状態を表すことは知られていたが、本動詞「ある」の基本義がどのように影響しているかについては必ずしも十分な説明が行われていなかった。また、中国語のアスペクトは「了」、「着」、「过」の研究は進んでいるが、「有」については取り残されていた。本研究では、存在型アスペクト形式においては、「ある」や「有」といった物の存在を表す動詞の基本義である「場所・空間的な存在」の意味が「客体」への焦点化という形で影響することで客体結果相となると想定し、その要因を明らかにすることに成功した。</p> <p>日中語の一般的ないわゆるアスペクトを対象とする先行研究は多いが、存在型アスペクト形式に関する日中語間の対照研究は未だ少なく、特にコーパスを用いた実例に基づく体系的な分析は皆無である。本研究は、日本語の「Vテアル」と中国語の「V有」および「有V」構文の特徴的な意味機能を、「場所的存在論」の観点を取り入れ、本動詞としての存在構文をプロトタイプとする参照点構造として捉え直すことによって、メタファー的拡張関係を持つ構文ネットワークとして位置づけることに成功し、その異同を明確にした。さらに、中国語で近年用いられつつある「有V」構文に関して実例に基づき体系的に分析・整理し、他の存在型アスペクト形式との関係も明らかにしている。加えて、日中対訳コーパスのデータに基づき「Vテアル」と「V有」構文の対応関係を考察し、「V有」構文は具体物の存在を前提とした変化結果を示し、存在動詞としての意味が比較的強く影響していることを解明した。それにより、「V有」はパーフェクトの用法がなく、それを補う形でパーフェクトの用法も担える「有V」構文が発達してきたという提案が可能となり、言語のダイナミックな変化の過程について示唆するところの多い研究となった。</p> <p>本論文は、認知言語学的観点から膨大な量のデータに基づいて客観的に分析を進め、物の存在を表す動詞から文法化したアスペクト形式は客体の状態に重点が置かれる表現となるということを、従来とは異なるアプローチによって説明した。こうした主張は言語類型論に新たな視座を提供するものであり、独創性が認められる。審査会では特にこの点が高く評価され、本論文は執筆者が自立した研究能力と学識を有することを示すものと認定された。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。</p>			